

兎の居た小屋

梅津純子

道向かふに兎小屋見ゆ疫病の始まりの日々を癒しくれにし
金網に寄れば白兎跳ねてきて鼻を押し付け餌を欲りにき

二部屋に据ゑたる兎の箱の前に固形の餌の食ひ残し見ゆ
クローバーを摘みて伸ぶるに白兎金網越しに啜へ引き込む

箱の陰に動きのありて灰色の兎身を出し此方窺ふ

青草の匂ひに釣られ灰色の兎もぢきに金網に寄り来

久々に小屋を覗けばぎつしりと段ボール積む兎の香無く

夕暮れに兎に摘み草与へぬし少女の如何に三年を経たり

雪壁の底の歩道を吾のみの往きの踏み跡踏みつつ帰る

久々に雪晴るる今日光あふれ部屋の鉢花にはか色めく